はぐくみ

家庭教育を考えるシリーズ

発行
鯖江市教育委員会
鯖江市社会教育委員会
協力
丹南愛護センター鯖丹支所

7号

考えてみましょう子どものしつけ（その３）
―中学生を中心として―

（鯖江中学校生徒による奉仕活動）

掛けてよかった「相談電話」

人間は誰でも大なり小なり心の悩みを持っています。その内容にもよりますが、それを自分の力だけで克服するということは、大変な精神的な努力が必要です。

大人の皆さん方であっても、家人や知人や有識者らにご相談をされるだろうと思います。まして、心身共に成長途上にある子供さんたちにとって、この克服は至難な業です。

家庭でのこと、学校でのこと、学習のこと、友だちのこと、進学・就職のことなどなどの悩みは、多角形的に広大されて存在しているものと思います。

それは、時には大人の皆さん方にとっては認識外の事実であったり、ささいな失笑に値する現実であったりする内容かも知れませんが、子供たちにとっては、強烈な精神的重荷となって苦難の自問自答を毎日くり返しているかも知れません。

又、親の立場から、わが子のことについて苦衷の問題を持っている方もいらっしゃると思います。

阪神大震災の被害者の方々の中には、お気の毒にも医療と合わせて「心のケア」が必要である方も多いと報道されていました。すなわち、高度な感情と感性を持っている人間には、常に「心の安定」が重要であるということを実証しているものです。

そこで、当所に設置されています「相談電話」のご利用をお勧めするものです。

親としての立場から、友だちとしての立場から、も ち論、お子さん本人自身から進んで受話器をとってほしいものです。

当「相談電話」には二人の相談員が常任していまして、どのような内容のご相談にも懸命に相談させていただきます。

もち論、個人のプライバシーは確実に尊重されまして、他にもれることは絶対ありません。

どうぞご気軽に「相談電話」のベルを鳴らしてください。

☎五二―六一一四

理想的な家庭の条件

1 お父さんが、家族の一人一人を理解してリーダー・シップをとること
2 家族がお互いの個性を認め合うこと
3 両親の生活態度が、子どものモデルになっているという自覚を持つこと
4 いつも明るく、やさしい言葉をかけ合うこと
5 両親が、愛情深い生活をしていること

レイビーズ（米国の心理学者）

告知板

来てみませんか 鯖江チャイルドセンターへ

学校へ行きたくても行けない子どもたちが、再び元気に登校できることを願って、小・中学生を対象に「鯖江チャイルドセンター」が、鯖江市勤労青少年ホームに開設されました。

児童・生徒の能力に応じたことを、計画的・積極的に取り組ませることにより、自立し、向上する力と豊かな心の育成をめざしています。

仲間とのふれあいの中で、新しい自分を見つけるためにも、悩んでいないで是非相談に来てください。

面接相談日
月・火・水・金曜日
子どもの活動日
水・金曜日
お問合せ電話番号
☎五二―五九八八

ブレーキをかけていませんか…？

子どもの自立へ

滴 涓

ママがくれなかったものは？

「ママは、僕がほしいものはなんでもくれた。でも、よく考えてみたら、なんにもくれていなかったことに気づいたというのです。なんと厳しい母への評価ではないですか。

さて、この「なんにも」とは何をさしているのでしょう。ひとことで言えば、正しいしつけをしてくれなかったと訴えたのです。お母さんにしてみれば、きっとガーンと頭をどやされたような思いがしたことでしょう。この作文は、親と子のかかわりにとってたいへん大事なことを教えてくれていると思います。

ママは、僕がほしいものをお菓子をほしいというとお菓子をくれた。鹿皮のジャンパーがほしいというと買ってくれた。僕がねだるとなんでも買ってくれたりお金をくれたりした。でも、ママは本当はなんにもくれなかったのだ——。」

フランスの中学生の作文です。フランスといえば、家庭教育についてなかなか厳しい国として、世界でも知られています。そのフランスの子どもがこんなことを書いていたのです。さしずめ日本の子どもならどう書くでしょうか——？

愛と理解で育てよう 社会性と自立心

難しい年ごろ

中学生になると、両親は子どものしつけの面で何かとまどうことが多くなります。なんでも「ハイハイ」と素直だった子が、口答えをしはじめ素直でなくなる。返事もほとんどしないで、何かいうとすぐ反発してくる。また友達のことや服装を気にする。親は子どもが今、何を考えているのかわからなくなる。こんなことに出くわすことがあると思います。この現象は一般的に中学一、二年のころと考えればいいでしょう。六年間、仲良く過ごしてきた小学校の友達や学校と別れて、新たな先生・友達と付き合うようになったので多少の不安も生まれます。それもありますがでも、それだけではありません。思い出して見てください。お父さんやお母さんにもこのようなご経験があったと思いますが、つまり、このような言動は、自我が目覚め、親離れの第一歩を歩みはじめたということです。

これを理解しておかないと、不安や不信感を感じ、子どもが「ワルクナッタ」と思わぬ誤解や錯覚を起こしてしまうことになるのです。

社会性を育てる

「いじめ」「不登校」などは今学校で問題になっていることですが、これらに共通する問題点の一つとして指摘されているなかに、社会性の未発達ということがあります。その理由は、現代っ子は、いろいろな機械・器具に取り囲まれて生活しています。機械は自分の願望を即座にかなえてくれますし、言う通りに働いてくれます。

しかし、人間関係は、親子・兄弟あるいは友達、みんなそれぞれに思いが違っていて、機械を相手にするように自分の思い通りにはいかないものなのです。そのところを十分理解していないと、不満や失望がかさなり、時には、落ち込んだり、衝突が起きたりしようとするのです。

このようなことをなくするために、家庭ではお互いに思いやりの気持ちを持ち、食事などのあと始末を一緒にしたり、整理整頓や清掃の手伝いをさせたりするなど、家庭の一員としての自覚を持たせることが大切です。さらに、地域の行事や団体活動へ積極的に参加し、人々との交流を深めることも必要でしょう。こうした体験をさせることによって、人の心の痛みを理解し、他人の立場を尊重するなど、複雑な社会と人間関係を学ぶことができ、心の成長にとって大きな意味を持ってくるのです。

自立性を育てる

「親の意見に反発する」、「無口になる」、「何を聞いても単発的な言葉だけで会話が続かない」、などのご経験がおありだと思います。こうした言動もみな自我の目覚めの現れの一つです。

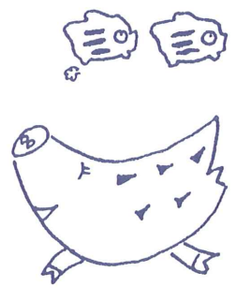
自我のめざめというのは、一人の人間として責任をもって生きていこうとする態度の芽生えのことなのです。これを大切に伸ばしていくことは、人生にとってきわめて重要です。従って、それがたとえ未熟な意見や言動であったとしても、親はその子の人格を認め、信頼していくことを心がける。つまり、いちいち命令しないで、その子の言動に責任を持たせるようしむけるということです。

あれやこれやと干渉のしすぎや、過保護などは決して子どものためになりません。ちょうど、平坦な道路から、坂やカーブの多い山道にさしかかった年代と考えていただいてよいと思います。

家庭の役割が問われるとき

「子は、親のいうことを聞かないけれど、することはちゃんと見ている」と言われますが、この年代の子どもはまったくその通りだと思います。

たとえば、父親は母親を責め、母は父をなじる、ときには愚痴やクドキがはじまる。こんな時、子どもは鋭い感覚で批判したりします。また、親の口と心と行動の矛盾もちゃんと見抜きます。それらを表にださないで、「知らんふりのいい子」という仮面をかぶるという演技だってできるのです。しかし、内心では憎しみ・悩みなどストレスがたまり、何かの機会に吹き出してくるということになります。

難しい年頃に入っておきるいろいろな問題は、わが子がひとりの人間として成長するため、越さねばならないハードルだと考えてください。この時期こそ両親の愛情や支援が必要なときはないのです。

子どもが思春期にさしかかった時は、両親つまり夫婦の真の愛情や生き方が試される時期だともいえそうです。